

## 「生活再建に向けたコミュニティの再構築

### ～障がいのある方、高齢の方を中心に～

#### 開催概要

日時 2012 年 8 月 20 日(月) 14:00～16:00

場所 人と防災未来センター 会議室(神戸市)

参加者 39 名

主催 Person-Centered-Planning 研究会

共催 兵庫自治学会

後援 神戸大学ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

企画代表者 藤田有希枝(明石市立高齢者大学校  
あかねが丘学園社会教育コーディネーター)

#### 【問題提起】

牧野 泰典氏 立命館大学非常勤講師

#### 【パネル・ディスカッション】

#### □パネリスト

吉田 収(神戸大学「カフェ・アゴラ」)

倉田 明(なぎさふれあいのまちづくり協議会委員長)

牧野 泰典(立命館大学非常勤講師)

青田 由幸(南相馬市 NPO 法人さぽーとセンターぴあ代表)

#### □コーディネーター

篠原 真紀子(Person-Centered-Planning 研究会)

#### 1. 開催の趣旨

災害時は、阪神・淡路大震災、東日本大震災に見られるように、その地域特性によって、被害状況や生活復興の状況が異なると考えられます。本企画は、障がいのある人、高齢の方を中心とした生活再建に至るコミュニティの再構築について、阪神・淡路大震災、東日本大震災の経験を踏まえながら考えていくことを趣旨としました。

#### 2. 問題提起

震災時における被災者救援と復興の課題

—阪神大震災と東日本大震災から浮彫りになる復興の諸課題—

立命館大学産業社会学部非常勤講師 牧野 泰典  
はじめに

大震災は生活基盤の全てを破壊する。当然のことであるが阪神大震災を経験した者としては、それを実感する。ライフラインが寸断されることで食事の用意や入浴ができず、交通機関の中心である鉄道がマヒすることで、多くの社会人は長時間の通勤を強いられる。何よりも震災によって大切な家族や住居が失われることによって被災者は今後どのように生きていくのか、その道筋もわからないでいる。緊急の救援が必要な被災現場においては、政治や行政の動きは遅く、被災地においては被災者が行政の迅速な救援を要望しつつも、独自に新しいコミュニティをつくり相互扶助を作り上げないと生活は成り立たない。本稿では、阪神大震災を経験した立場から筆者の当時の経験を踏まえ、被災地や被災者の支援と復興について何が必要なのかを紹介していきたい。

#### 1 章 阪神大震災の経緯

平成 7 年(1995 年) 1 月 17 日、筆者は当時 立



命館大学大学院に在籍しており、修士論文を執筆中に被災した。あの時の光景と音は今でも鮮明に残っている。それからほぼ通常の生活として立て直すまで半年かかった。これらの経緯を自らの実体験と記憶をもとにまとめていく。

筆者の自宅は神戸市東灘区である。

### **(1) コンビニエンスストアのコピー機の故障は震災の前兆か**

1月17日はほぼ徹夜状態であった。修士論文をほぼ書き終え、データ保存とプリントアウトを行っていた最中であった。そして当日は深夜にコンビニエンスストアでコピーを取りに出かけた。しかし今になって思えば奇妙であったのは、店舗のコピー機は2台とも故障していたこと。一度帰宅し、もう一軒別のコンビニエンスストアに出かける。震災から2時間ほど前のことだった。ここでもコピー機が2台とも故障していた。つまり短時間に4台ものコピー機が使えない状態であり、以前にはなかった現象である。震災前ともわからず、帰宅して少し遠い3軒目の店舗にでかける準備をした。

### **(2) 被災の瞬間と避難所生活**

1月17日 午前5時30分、新聞が配達される。それに目を通し出かける準備をする。そして5時46分、いきなり揺れるのではなく、まず停電が起こる。しかも自宅マンションだけでなく付近の街路灯も一斉に消える。何か大きなことが起こると思った。ズズズ・・・という地鳴り。数十秒は続いたと思われる激震。縦揺れ、横揺れの双方が一気に起こり、部屋のタンスが崩れ、重い冷蔵庫が踊るように動き出す。揺れが収まると何やらガス臭い。給湯式のマンションであったので、給湯器が廊下に倒れガス漏れがしていた。マンションのコンクリートが割れ、梁が折れている。外に出てみると別世界に変わっていた。近所の自宅やマンションが倒壊していた。ライフラインも通じない。

自宅に戻り、必要な荷物を取り出して一旦車に避難する。避難所にいくまでの3日ほどは車中で過ごした。家族とともに毛布や最低限の食料を積み込んで車中へ。当然眠れない。車の燃料も少なく、エンジンを止めていたので暖房は使えない状態だった。寒さの中、携帯ラジオで震災関連のニュース。当時は「兵庫県南部地震」と呼んでいた。生き埋めになったとされる犠牲者が200人・・・、1600人・・・と増えていく。並みの地震ではない、歴史的な災害だということを実感する。

被災現場は神戸市東灘区の岡本地区。筆者の最寄りの避難所は母校でもある本山第二小学校であった。一度は立ち寄るものの被災者が多すぎて居場所がない。しばらく車中で過ごしていたときに、マンションの管理人から別の避難所があると紹介してくれたので、そこに立ち寄ることにした。そこで1か月ほどお世話になる。その後、宝塚市に一時避難し、震災から半年後に元の地域に戻るが、その経緯については以下に簡単にまとめることにする。

阪神大震災被災から元の地域に戻るまでの経緯

1. 17 被災

1. 20 まで車中で過ごす

1. 21 避難所でお世話になる

2. 14 知人の紹介で宝塚市逆瀬川に仮住まいする

7. 18 東灘区に戻る

### **(3) ライフラインの寸断と通勤・通学の問題点**

被災してからの1か月はガスと水道のない生活が続く。長くお世話になった避難所でも、電気は比較的早く復旧したが、ガスや水道は使えない。煮炊きはカセットコンロを用いて、水は近くの川や地割れから湧き出した湧水を大型のバケツに溜め込み、炊事やトイレ用に使った。衛生面でも課題があった。これは自宅で過ごした被災者、避難所にいた被災者の両方とも同様であった。

通勤・通学の問題も大きかった。避難状態であ

っても、生活のために仕事をしなければならない。また、学生（特に受験生）は進路に向けての準備をしなければならない。職場や学校に通う際、交通が寸断されているために長時間歩いて通勤・通学をしなければならない。

鉄道に関しては、神戸市の場合、阪神大震災直後からJR・阪急・阪神のいずれもが寸断され、交通網がマヒした。阪神については最も早く2月までには青木駅まで開通したものの、JRは住吉駅から六甲道駅までの路線が復旧するのが4月、阪急に至っては西宮北口駅から夙川駅までの路線復旧が6月までかかった。阪神間の大動脈が長期間にわたって不通となり、代行バスが運転されていたが、鉄道の輸送力と定時性には到底及ばず、待ち時間3時間、西宮～神戸の乗車時間は渋滞もあって8時間などという事例も珍しくなかった。多くの人々はバスに乗る代わりに長距離、長時間を歩いて通勤・通学するようになったのである。この事例は、東日本大震災発生時の首都圏でも帰宅難民が発生したように、都市部の通勤者・通学者には極めて影響が大きいものである。

## 2章 阪神大震災における教訓と課題

阪神大震災は都市災害におけるインフラの脆弱さや希薄となった人間関係の再構築が必要であることを示した。インフラの脆弱さについては電気・ガス・水道のライフラインはもちろんのこと、電話が通じないという課題も含まれる。

### (1) 災害時における情報通信関連のインフラの脆弱さ

1995年当時は現在ほど、携帯電話サービスやインターネットが普及していなかったが、それでもポケベル、簡易型携帯電話（PHS）、家庭用のパソコンが徐々に根付いてきた時期でもある。これらや電話などの情報通信網が震災時には送電線の切断、鉄塔の半壊などによって通じない。唯一、公衆電話の緊急電話が通じる地域があるのみであった。しかも緊急電話は回線に限りがあるた

め、使える人数も時間も制約される。多くの被災者はそれらを使って極めて短時間に安否確認するのみであった。そのため、被災者のネットワークづくりや詳細な安否確認は専ら口コミや避難所に掲げられていたメモに頼ることになる。極めて初歩的・原始的な手法であるが、情報通信機器が使えない環境のなかでは最も確実であることを再認識させられた。電気系統が破壊されるとあらゆる情報通信機器は使えないからである。

### (2) 高齢社会における人間関係の再構築

1995年当時から高齢社会であった日本。そこで災害が起こった時にどのように助け合うか、新しい人間関係やコミュニティの構築が求められた。神戸は都市部であるため、農村部で見られるような典型的な共同体社会（F. テンニースの「ゲマインシャフト」）はほとんど存在しない。親戚関係や友人関係も希薄で仮設住宅に転居後、孤独死する事例も相次いだ。現在においても孤独死は、あらゆる地域で起こるものであり、「無縁死」という言葉でも知られている。阪神大震災ではボランティアの活躍が大きくクローズアップされ、新しいコミュニティや人間関係づくりを担う重要な役割を果たしている。これらの活動をどう支援し、拡大させていくかが震災時の被災者救済や高齢者や障がい者を支援する社会福祉にとって極めて重要であろう。

## 3章 高齢社会・情報社会となった日本における災害時の課題

### (1) 高齢社会の拡大

日本は主要国では最も高齢化率が高い。日本は1970年に高齢者比率が7%以上となる「高齢化社会」、1994年には14%以上となる「高齢社会」、2007年には21%以上となる「超高齢社会」となった。2007年には21.5%、2008年には22.1%、2009年には22.9%となり、現在は23.2%となっている。全国的に「4人に1人は高齢者」という事態になってい

る。しかも若年層は都市部に集中するために、地方の高齢化率はさらに上昇し、過疎地のなかでも人口の半数以上が高齢者という限界集落が数多く出現しているのである。東日本大震災で被災した東北地方の多くの市町村が過疎地であることも、震災後の復興が早く進まないことの一因であろう。

## (2) 情報社会への過度の依存

2章(1)でも前述したように、情報通信機器は電気系統が破壊されると一切通じない脆弱さを持つ。そのため、パソコンや携帯電話の情報拡散力に過度に依存すると緊急時に連絡が取れなくなることもある。阪神大震災ではそのような事例が多く見られた。しかも最近は公衆電話そのものが少なく、そこに備え付けてある緊急電話も使えない。近年では新しいメディアとして「社会性を高めるメディア」(ソーシャルメディア)としてツイッターが注目され、東日本大震災では多くの人々が携帯電話からツイッターによって災害情報を知るなど、新しい取り組みが活用されている。

現在は阪神大震災当時よりも情報通信技術が発達しており、災害時にも強い情報機器として活用でき得るものも出てきている。今後起こり得る大災害においては、これらのメディアを活用しつつ、あらゆる機器が使えない場合にはロコミやメモも併用するなどといった手法を確立することが重要であろう。

## 4章 阪神大震災と東日本大震災の相違点

### — 阪神大震災の被災者からみる東日本大震災の被災地域における復興速度 —

阪神大震災においても個々の被災者の生活再建という大きな課題が残っている。街の復興についても震災前と同じ状態で復興できるわけではない。住宅再建をどうするのか、あるいは事業者の店舗や会社の再建をどうするのか、地元の地域経済にも大きく関わるこれらの課題はまだある。

しかし、震災後1年でどの程度復興できたかという点については、神戸を含む阪神地域と東北地

方では大きな差があるように思われる。神戸の場合は元々が東京～九州にまたがる「太平洋ベルト地帯」に位置する大都市であり、全国から多数の応援・救援を頂いた。ライフライン道路・鉄道などのインフラの再建を迅速に行って頂いたことにより、その後の地域における経済活動も行いやすくなり、徐々にではあるが力強く再建できていたと、一市民としての感想ではあるが感じている。

他方、東日本大震災の場合はどうであろうか。阪神大震災に比較してあまりにも範囲が広域であり、津波があらゆる建物やインフラを押し流してしまった。原発事故の影響もあり、元の住居に立ち入れない、以前のように農業や漁業を営めないことで、東北地方は一部の地域を除いて復興が進んでいないという印象を受ける。とりわけ、津波で大型漁船が打ち上げられたまま撤去されていない宮城県気仙沼市や、役所の残骸が残る岩手県陸前高田市などの各自治体の状況をみると、復興の進み方は極めて遅いといえるだろう。過疎化が進む地域の支援、雇用拡大につながる産業振興策、後述する「風評被害」など、東日本大震災には阪神大震災にはなかった課題が生じており、震災の教訓を生かした政策づくりが望まれる。

## むすび

### — 本当に必要な復興支援に求められるもの —

阪神大震災の経験から被災地の救援と復興に求められるものの一つとして、極めて重要なものは正確な情報である。東灘区で被災した筆者が長田区の大火災のニュースを得たのはラジオからのニュースであり、テレビでその映像を見ることができたのは後日になってからである。さらに、東灘区にあるLPGタンクが爆発する危険性があり、テレビで避難を呼びかけていたが、停電でテレビを見られない被災者が街を歩いているときに警察官から国道2号線より北へ避難するように指示されていた事例もあった。これらの体験からも被災地の現場では正確な情報が行き届いていない。

どこに行けば避難所があるのか、避難所のなかでも比較的食料が多い場所はどこか、入浴できる銭湯はどこかという生活情報や、何が起きているのかを丁寧に説明する情報を被災者は望んでいる。こういった被災者や被災地の望む正確な情報と、東京キー局を中心とする大手メディアが映像価値のあるものと思うセンセーショナルな場면을放送することとはニーズが合致しない。

筆者自身も、テレビが見られる環境にあった避難所や宝塚市逆瀬川の仮住居においても、映像の大半が長田区の大震災であったように思える。被災者や被災地においては、いつまでも同じ放送を繰り返すことは望んでいない。災害後の迅速な救援と、その後の復興に役立つ取り組みに関して何が必要なのかを知らせる情報が望まれている。

東日本大震災では、阪神大震災のときよりもさらに正確な情報が復興にとって重要となってくるだろう。その一つが「風評被害」の抑制である。東日本大震災はあまりにも広域な津波被害とその後の原発事故により、何が危険なのか判別しようのない情報が飛び交った。前述のツイッターのようなソーシャルメディアは迅速に災害時の情報が得られる反面、真偽不明の情報が拡散される問題点がある。東北の農産物や海産物は食べてもよいのか、避けた方がよいのか、安直なデマにより危険視する報道が一人歩きをする。その結果、被災産業は打撃を受け、地域の人口の流出が続き、その中には医療関係者のような地域住民の命と健康を守る人々の流出も続いている。「危険なものを安全というのがデマ」であれば、「安全なものを危険だというものもデマ」なのである。この件については日弁連の宇都宮会長が「デマを抑制するには、インターネットの発言や風評被害を罰するのではなく、震災や原発事故について政府が正確な情報を提供すべきだ」と声明を発表している。震災は直後の救済を迅速に行うことと、長い時間をかけて復興に取り組んでいくことが必要である。そのような震災時における救援と復興のためには、

①正確な情報を提供すること ②情報通信機器が使えないことも想定してロコミで情報を教え合うことができるような人間関係を構築すること ③そのような人間関係を新しいコミュニティの形成という文脈で考えておくこと ④交通網の寸断に対応した通勤や通学の手段を講じておくこと などが必要となってくるであろう。全国的に大地震が起る可能性が指摘されている昨今、阪神大震災や東日本大震災で明らかになった課題や教訓を生かした政策がより重要となるだろう。

#### 【参考文献】

- ・津田大介 『Twitter 社会論 -新たなリアルタイム・ウェブの潮流』 洋泉社 2009年。
- ・原発報道監視：「表現の自由を侵害」日弁連が抗議声明（会長 宇都宮健児） 2011年。
- ・津田大介 『動員の革命 -ソーシャルメディアは何を変えたのか 中公新書ラクレ 2012年。



### 3. パネルディスカッション

#### 【第1話題提供者】

地域住民がみなで如何に要援護者を支えていくのか - 灘区なぎさふれあいのまちづくりの取り組み -

なぎさふれあいのまちづくり協議会

委員長 倉田 明

#### (1) 発災からHATのまちづくりへ

地域で暮らす高齢者を特別介助していくシステムはなく、家族と一緒に避難した状態。  
・灘の状況 支援の谷間 支援は緊急を要する順 支援が受けられない地域が存在

支援を受ける・受けないで、利害関係による溝の存在

・仮設住宅 - 2年経っても色々な問題が浮上

一筋縄では円滑にいかない難しい人間関係

・弱者優先入居の災害復興住宅 1998年春街開き

・市営住宅・県営住宅

借り上げ住宅 - 県営住宅や市営住宅に収容できなかった時に入居。借り上げ住宅は20年を目処に返還。平成27年度で返還期限を迎える

震災当時は若かった人が高齢化し、引越しその他生活環境に即応することが難しくなっている(被災した高齢者が何百人と在住)

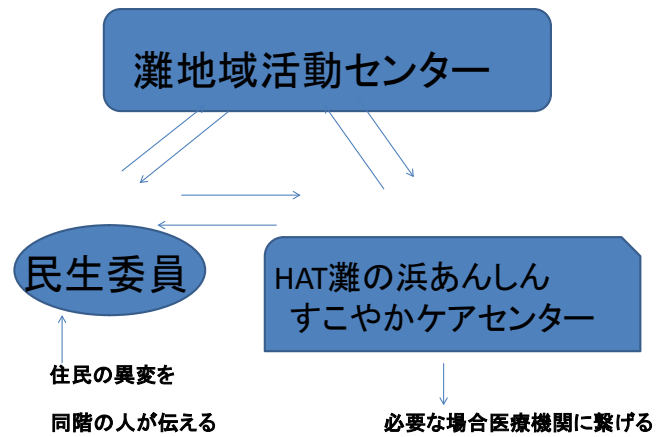
・HATの生活環境

HATには古来の伝統行事はない → HAT自体のあゆみが伝統の礎となる

・生活するためにすべて揃っている施設  
幼稚園 学校 お店(大手スーパー) 各種クリニック 薬局 理髪店 美容院  
介護支援センター 喫茶店 個人専門店  
各種 クリーニング etc.

医療・福祉・生活(買い物など)・介護が1つの場所に揃っている

随所、バリアフリーの設計。各所に少し歩いたら休み憩えるベンチが設置されている



・住民の声「灘はかたまつとるよ」  
当初は単独の棟ごとの何度にも渡る申し出(例 信号機の設置) - 行政には受け入れられず

⇒ HATが一丸となることで、申し出受け入れが実現していった

まとまることの意味 - まとまる事により数々の改善がなされていった

## (2) HATの取り組み

・HATの行事の特徴 1つのマンションだけでなく、東西南北一体となって行う誰もが知り合いの街目指して・・・ふれあいのあるまちづくり

北1～13番館 南1、2番館

西1、2、3番館 東1～5番館

各棟の掲示板

広報活動 ふれあいまちづくり協議会発行 広報紙 10年

・顔見知りになるための行事 - すべての棟対象で大イベントとなる

お餅つき大会 東西南北すべての棟対象

(3千余棟に相当)

- 無料でチラシを全世帯に配布

夏祭り 東西南北すべての棟対象

日常の活動 火の用心 – 近所の人たちを誘い合って行く。子どもを含む。

歳末パトロール – 12月26日～12月31日  
挨拶運動

・世代間交流をふれあいのまちづくり協議会が企画している 幼稚園との交流等  
ふれあいまちづくり協議会 – 役員会、定例会を毎月1回開催

・役所と会議する場所がある – 提案事項は地域活性化案として取り上げていく行政との連携ができてきている

・負担が多くなりつつある民生委員 – 1人で多くの独居高齢者世帯を担当

・HATの近所付き合い – 高層団地だけれど、近所付き合いはきちりする  
隣づきあい濃厚 何かあれば民生委員に電話がかかってくる習慣

民生委員は問題がある住民に対して、あんしんすこやかセンターにつなげて、更に必要な場合、すこやかセンターが医療に繋げている

### (3) 存在する問題

・どこまでプライベートに入っているのか  
難しい問題

安否を新聞受けで気にかける同じフロア  
一同士 → 溜まっていると民生委員に連絡あり

→ ふれまち協議会 → すこやかケアセンターに持ちかける 情報交換

個人情報の問題もあるが、その人の生活を守るために、許される範囲で情報交換

・閉じこもる方も現実おられる。  
・街が新しいため、自営消防がない ⇒ 未だ、自営訓練には至っていない

・自治会のあるところと無いところが存在する  
・高齢化に伴い、生活の利便性はあっても、「もしかした時に大丈夫か？」という不安が大きい

・借り上げ返還期限による住宅移転の問題  
– やっと慣れ親しんだ生活環境を高齢になって、引っ越し、全く新しい場所で住まなくてはならない不安の存在

・バリアフリーという設計にも、実際には随所に小差の段差があり、足元の危険が存在する

・担い手の問題 協議会の高齢化 一方、下の世代は働きに出ていて協議会の仕事は負担

### 【第2話題提供者】

私の生い立ち～震災～現在

神戸大学 カフェ・アゴラ 吉田 収

私は生を受けたとき、脳に異常が見つかり、医者からは脳性小児麻痺ですと、言われたらしいです。

手足も動かなく、言葉もいつまで経っても言えませんでした。私は養護学校に入学したとき、初めて教室に入り先生から『吉田収君』と言われても、空気音『ふう～』しか出ませんでした。そして学校生活が始まり私は勉強が嫌いでした。しかし 詩を書くのが好きでどういいうわけか神戸市文章作品の中に入りました。その詩は『僕が通るとみんなが振り返る そして笑う、大人は{近寄ったらダメ、移るから}と子供たちに言っている、でも 気にしない だって、僕はいい顔だから。』というものです。私は小学校3年まで一歩も歩けませんでした、歩けたのは3年の体育祭で マットの上を5、6歩歩き、先生がマイクで『吉田君が今、歩いています』と言ってくれ それから私は少しずつ歩けるようになり、同時に私の人生も歩き出しました。しょっちゅう挫折して、心が痛くなりました。でも、私は写真と出会い自分を表現する手段を見つけました。私は養護学校高等部を卒業すると大阪写真専門学校に進みました。まず、圧倒されたのは みんな体も身長も私の倍有り、不安を感じた入学式でした。そして学校生活を送るにつれ友達も多くなり 私は写真に燃えていまし

た。でも、油断もあり、すると担任の先生から呼び出しがあり『吉田 これは何を意味している写真や、いい写真を撮ろうとしている、もっと見ることが大事にしろ、うまく撮ろうと考えるな』と言われて写真を破られました。健常者と一緒に出来る思いが私に勇気を与えてくれました。

私は重い機材を担ぎ5、6キロ歩き写真を撮りまくりました。足が痛く、疲れてくることがありました。障がい者であることを忘れて、パチンコに行ったり お酒を飲みに行ったり 波乱万丈の2年間でした。卒業後、就職は難しくアルバイト程度の仕事しか有りませんでした。私は写真をしながら私の人生まで変わったような感じがします。父の店がショッピングセンターの中に出来、かねてから希望していたコーヒーショップを店の一部を借りて開店することになりました。私は2年間サービス業の勉強の為 大阪のレストランに行きました。いつの間にか私のあだ名は要領のヨッさんと言われるようになり 2年間 夜、4時から12時まで勤めさせてもらいました。レストランのレストランのオーナーは私のことも気遣ってくれ「吉田さん ええか 商売というのは人と人の間で成り立っていくものや、人の喜ぶことをしないと商売は出来ませんよ。頑張りや」と言ってくれました。いよいよ お店を開店する日がきました。私が一番心配だったのは お客様の障がい者に対する印象です 汚い 印象でないか？ 入り辛くないか 心配しました。でも、お客様は入ってきてくれ、毎日、来てくれる お客様も多くなりました。「マスターの顔を見ないと一日が始まらない」と言ってくれるお客様もいました。私にとって大事な7年間でした

ようやく落ち着いてきたとき悪夢が襲ってきました。阪神淡路大震災です！あつという間に店はガタガタになりコーヒーカップはみんな落ちて割れ、店の天井はひびが入り雨漏りをしていました。無残な姿の店を見るのは悲しく絶望感だけでした。資金の関係で店を断念するしか仕方なく、ガタガ

タになった店を片付けるときは虚しさ寂しさが頭の中にこびり付き、そのときこそ生きることの厳しさを知りました。でも私はまだまだ恵まれていると思い、私は私に出来ることを必死に考えました、そして考えたのはコーヒー豆を売ることでした。コーヒーメーカーに交渉して販売させていただくことになり、まずは、売るところを探さなければいけません。人が集まってくる場所：教会にお願いに回りました。牧師様は快く引き受けてくれ。そして私は養護学校にも知っている先生を頼って行き、「放課後 先生方にコーヒー豆を販売して頂いてもいいですよ」と言ってもらい 快く承諾して頂きました。皆様の協力でコーヒー豆の販売は順調な船出となりました。私はクルマで移動販売を始めましたが、商売の厳しさもあり 売れない日をどう乗り切るか「僕、何をしているのだろう」と惨めになり 飛んで帰らなくなったこともありました。でも「待ってましたよ」と言って頂くお客様もいて、障がい者にも商売が出来るかも知れないと思い 商売のおもしろさを伝えていくことが出来たらいいなあと思いました。お客様はおいしいものしか買わない。なんぼ障がい者が売っても 商売はシビアです。お情けで買ってくれたとしても1、2回だけです。だから私は神戸で1、2番のおいしい豆を仕入れることでお客様がおいしいと言われるものを販売することが出来るようにしたかったのです。道路のバリアフリーも大事ですが、心のバリアフリーも大事です。コーヒーショップを兼ねた小規模作業所は六甲道駅前ビルの中でしたが、ある出来事があり仕方がなく、1年後に水道筋に移転することになりました。

その頃、国会で障害者支援法が可決し、福祉施策も変わりつつありました。小規模作業所の規模を大きくして、NPO 法人化に移行しなければ、作業所の存続が難しくなりいろいろと考えました。悩みながらいたら 神戸大の(あーち)の津田先生より、障がい者の福利厚生のためにこれから



大学に作られるカフェでの仕事の話をもちかけられました。私はおもしろいプロジェクトだと思いやってみたい気持ちになりました。悩みながらも、このチャンスを活かさないといけないとみなさまに勇気付けられ、やってみる決心を固めました。カフェアゴラも4年目に入り実習生も育ってきて今年4月から実習生の中から二名、神戸大学発達科学部に障害者枠で採用されました。今日も私の通訳としてきてくれています、ひとみさんです、どうぞよろしくお願ひします。ひとみさんは聞きとりにくい、私の言うことを理解してくれ、他の人に伝えてくれる 本本当に助かります。こういう仲間達と仕事が出来ることありがたく思います。

これからは私がどういう状況の中で震災を迎え、震災を乗り越え、震災で失うことも多かったが生きることの大切さを感じ、障がい者が生きていくにはどうしたらいいのか？考えていきたいと思ひます。

私は32歳ごろ親元から離れ1人で住むようになりまし。六甲道にお店があり、その同じビルの3階に実家がありました。一人で住むことは大変なことは分かっていたが 親元から離れて自由になれる思いがありました。でも一人で生活するのは経済的に負担がかかります。初めはワンルームマンションに住んでいましたが、もっと安いところと思ひ、文化住宅に引越ししました。2階建ての1階です。文化住宅ですから 木造長屋です、そこに荷物を入れ、まあまあ快適な生活をしていました。そうして居る間に父の具合が悪くなり半年の闘病生活後父はガンで亡くなり、実家には母だけとなりました。私も母のことが心配で実家と文化住宅といたりきたりしてました。平成7年1月私はお店の決算と税金申告があり友達からもらったパソコンを文化住宅に置きに行き 『さあ 今日の夜はここで泊まってパソコンで決算をしよう』と思ひてました。でも店が忙しく 疲れて 文化住宅に行くのをやめました。

実家で寝ました。その日が平成7年1月16日です。私はリビングで寝ていると強い揺れを感じ、大きな音と共にテレビが転げ熱帯魚の水槽が落ちました。

私は寝ぼけながらも何がおきたのか？分からなく呆然と座り込みました。その日が平成7年1月17日 阪神淡路大震災です。私は母のところに行き無事なことが分かり 安心しました。しばらくすると近所の人に来て『うちの家が焼けているのよ、何か着るもの貸して』と来られたのです。

私はいろいろな情報からここから避難をした方がいいと思ひ、ここから降りるにはと考え、エレベーターも動かなく、非常階段しか降りる方法がなかったのです。手すりが付いていない非常階段を一步一步、降りて外に出てみると警備員から1階の店舗には入れませんと言われ 仕方なく 母と共に近くに止めてあった 私の車に乗り、兄の居るマンションまで行くことにしました。車を走らせました。信号が止まり 道にはガレキが散乱してました。昨日、泊まるはずだった文化住宅の近くを通ると揺れが激しかったみたいで、倒壊している家が多く 文化住宅の屋根も見えませんでした。車から見る風景は口で言い表すことが出来ない光景でした。兄の家にしばらく居ましたが余震があり、今度、大きな余震があると危ないと義理の兄の実家《大阪 堺市》に避難をさせてもらいました。

すると 堺の方まで兵庫県警から電話があり『吉田収さんはご無事ですか？』『大和町にある文化住宅が崩壊して多数の方が亡くなりました』という連絡でした。

もし、1月16日に文化住宅に帰っていたら おそらく命がなかったと思うと不思議な気持ちになり そのときこそ 生死の境目はいつやってくるか わからない！

阪神淡路大震災で多くの方が亡くなり 住んでいる家もなくなり 家族を亡くした方も数多く居られます。 大震災の恐怖をまざまざと感じまし

た。私は心から生きることの厳しさと、生きることがどんなに大事か少しは分かったような気がしました。同時に私も命が無かったかもしれないと思うと神に感謝をして、これからの人生を精一杯生きていかねばと覚悟を決めました。

阪神淡路大震災の爪あとは大きく私の店と実家があるビルも被害が大きく、鉄骨が3本折れ、復旧工事をするようになりました。復旧工事に6ヶ月かかり、復旧工事費用や店の内装費のことを考えるとお店を再びするのをあきらめるしかなかったのです。

ここからは障がい者がこの社会を生きるのに何が大事であるか、また障がい者が活動していくことで周りの人がどう変わっていくのかを少しだけ言わせていただきます。

私は前の実家に一人で住んでいます。今も少しは歩けますがほとんど車椅子に乗っています。今、地震がおき避難をしなければいけなくなったらどうして逃げ出すか？エレベーターが止まり、非常階段で手すりもなくどうして降りたらいいのか？また運よく降りれたとしてもどうして歩いて避難すればいいのか？？？

私の住んでいるビルの管理会社はそこそこ障がい者に理解があります。マンションの入り口に一段段差があったのですが私は何とか出来ないのかなあと言いに行くと調査して全体会に《入り口の段差をなくする》案として皆さんの同意をもらい半年後に工事してくれました。ありがたかったです。でも非常階段に手すりをとお願いしたらその案は否決されました。非常階段設置の条件はよくわかりませんが急な階段で持つところも何も付いていないので今の私では一人で降りるのは無理だと思います。ここでは非常階段のことを取り上げましたが障がい者の立場から見るとまだまだ街には危険で使いにくいところが多くあると思います。

国が障がい者の生活を根本的に理解してくれて

いるか？疑問に思うところもあります。私は障がい者の権利を訴えなければいけないとは全然、思っていません。だって健康者だって苦労して生きているのですから。障がい者も健康者もお互いの立場を尊重し合いながら共に生きていくことだと思います。私はよく街をぶらつきます。街を出歩くといろいろな事が見えてきます。

この頃JRに車椅子で乗るとものすごく社員教育が出来てきたなあと思います。車椅子で乗られる方の対応がスムーズになってきています。私もJRの方々が丁寧にしてくれるので（ありがとうございます）と感謝を込めて言います。私は仕事にはノーステップバスに乗って行っています。

私が初めてノーステップバスに乗ったのは4年前神戸大学発達科学部で私の採用が決まりカフェゴラで仕事に付くときです。私は緊張しながらバスのドライバーに『車椅子で乗れますか？』と聞くとバスのドライバーは『今、忙しいかこんどにして』と言われました。私は心の中で『私も忙しいんだ何とかセンか』と思いました。次のバスが来てドライバーにお願いしたらドライバーは一生懸命にスロープを出してくれ、乗せてくれたのです。今ではスロープの出し方を覚えてくれているドライバーも増えてきてやきもきしなくても乗れるようになりました。バスのドライバーの方も車椅子の利用者が少ないからスロープの出し方が分からないのです。障がい者がもっともっと街に出て健康者が障がい者と付き合うこと、邪魔臭いと思っていることをちょっとずつでも当たり前だと思ってもらえるようにしなければいけないと思います。

障がい者もただの人であり普通に生きたいのです、普通に生きるにはどうするか？

障がい者も普通に生きればいいのか？よく耳にするのは『障がい者やのに親のいうことを聞かない』『障がい者やのに危ないことをして』などよく聞きます。私はそんな障がい者を拍手して上げたいと思います。

年頃になると親のいうことを聞かなくなるのが当たり前なのです。また、大人になる上で色々な経験をする、数多くの経験をすることは危険が付きまとうのです。だからこと障がい者がいろんな経験をして、親元から離れていくことは当然のことだと思えます。

話はちょっと長くなりましたが、どうか障がいを温かく見守ってください。

最後に東日本大震災で多くの方が犠牲になり、また今もなお苦しんでおられる方に心からお見舞いを申し上げます。今日はありがとうございました。



### 【第3 話題提供者】

#### 南相馬における障がい者支援の実情

一 発災直後と現在を時系列的に見て一  
さぼーとセンターぴあ 代表理事 青田 由幸

##### (1) 発災直後

- ・物資配りは安否確認を兼ねて
- ・屋内待避により限界を極める障がい者の姿が浮き彫りにされてくる
- ・一旦、外に出て、危険な状態、悪化する状態を食い止める必要性

↓

- ・国の方針である屋内待避の状況下で事業所を開所しなければならない状況
  - ・認可の難しさ
- 事業所自らの努力一 さぼーとセンターぴあの避難マニュアルを作成し、直ちに実行できるような訓練体制を整える
- ・如何に行政に理解してもらおうか

利用者 一人一人の個別事例を検討し、開所のニーズを市・県側に示していく

- ・開所する事業所がぴーなつつのみの状況  
← 各種の SOS がぴーなつつに集結  
郡山に居を置く JDF ふくしまと繋がる
- ・避難所にいない障がい者  
(他県、他市にも同様な状況がみられる  
(JDF の他支援情報から))

↓

南相馬を範例とすれば他地の障がい者の状況も見えてくるのではないかという事になり JDF が全国ネットで南相馬の支援乗り出す

- ・要をなさなかった要援護者リスト  
このリストを基に自衛隊がスクロールをかけ訪問調査したが、SOS の入った障がい者の名前はそのリストには一人も存在しなかった

- ・一体、障がい者はどうなってしまうのか

さぼーとセンターぴあと JDF が実施した南相馬市在住の障がい者に対する全数個別訪問調査実施

- ・実施までに困難を要した個人情報開示  
同意による要援護者リストでは、緊急時には対応できなかった状況

災害時における個人情報

内閣府 (2006) 「災害時要援護者の避難支援ガイドライン」

ぴーなつつ・日本障害フォーラム (JDF) (2011) 「障害者が安心して暮らし・働ける南相馬市をめざして一緊急避難時における要援護者調査から一」報告書

- ・南相馬市の個人情報条例を駆使して災害時の個人情報を開示

南相馬市個人情報条例中、4 章個人情報の利用及び提供 (目的外利用及び外部提供の制限) 第 11 条 実施機関は、第 7 条第 1 項第 1 号に規定する個人情報取扱事務の目的の

範囲を超えて当該個人情報を利用(以下「目的外利用」という。)し、又は当該実施機関以外の者に提供(以下「外部提供」という。)してはならない。ただし、次の各号のいずれかに該当するときは、この限りでない。(4)個人の生命、身体又は財産の安全を守るため、緊急かつやむを得ないと認められるとき。

↑

この存在があるにもかかわらず、うまく運用されず存在すら浸透していない状況

避難所にいないのではなく「避難できなかった状況」が個別訪問調査における当事者の声からわかってくる

・発災時、障がい者は、何を求めているのか・支援者は何をまずしなければいけないのか

・さぽーとセンターぴあと JDF が実施した南相馬市在住の障がい者に対する全数個別訪問調査から浮かび上がった支援のニーズ

・避難所にいないのではなく「避難できなかった状況」が個別訪問調査における当事者の声からわかってくる

→ 医療機関への橋渡し

生活支援等に繋げる必要性

再度地震等が起これば逃げられないような状況の把握 etc.

## (2) 現在の状況

・孤立化した状況の南相馬  
地場産業の先行きの見えない中、仕事が入らない状況下での就労支援

・事業所の自治的活動  
カンバッチプロジェクトー南相馬ファクトリー

ひまわりプロジェクトーJDF 支援センター  
ふくしまとコラボレーション・・・支援を受けている間に何とか立ち上がろうとする努力

## ・新たな問題

原発の問題が大きいのかかかってきている現状

南相馬は風向きの変動から双葉郡のように線量は高くないが(郡山や福島より低い)、居住不可能な地域(飯館、浪江の一部、双葉の一部)が隣接するという事で、外部からは恐ろしがられる

現に、ホットスポットもあり、発災当時から線量も下がっていない地区も存在する居住不可能な地域に隣り合せの状態  
ー新たに誰も住みたがらない、新規産業も敬遠

・支援利用者の増加ー不足する支援スタッフー支援スタッフの疲労

・高齢に伴う疾病の増加ー不足する医療スタッフー医療スタッフの疲労

・仮設住宅で「大きい声がだせない」等制限の中で我慢の限度を超えてくる障がい者に事業所利用やその他生活が充実する社会資源を提供していくことの必要性。

・仮設住宅サロンー寄合の場であるはずのサロンに仲間割れが発生している

・従来の雇用体系では先行かない状況  
30代、40代の労働層は放射能の不安を否定できない。50代だと余命30年であきらめもついている状況。しかし、若年層はこれから子どもを産んで育てるとなると、たとえ線量は低くとも、閾値の問題では処理できない放射能が与える人体への影響についての不安は拭いきれない  
→結局はその人本人の選択に委ねられる若年層に長く勤めてとは言えない現実。

(ボランティアについても同様、若年層は1週間が限度)

・雇用形態の見直し 残っている60代以上の人たちの雇用創出 →ヘルパー養成など必要か



#### 4. ディスカッション

(フロアー：ふれあいまちづくりサークル関係者)

倉田さんが会長をしているふれまちで大学のサークルとしてやっている。1月17日が近付くと、震災関連の話をする人と、家から出ようとしないう人がいる。スタンスが異なる。高齢者だからとひとくくりにはできない。南相馬でも被災者間で分断が起きているということだが、倉田さんはどういう雰囲気作りをしているのか。

(倉田) 来ている高齢者にはグループができていて、話しやすい人がいる。神大喫茶は何ができるかなというスタンスでやっている。住宅がもう数年で出ないといけないという不安を1対1では、語る人がいる。参加している人が他を批判しないという雰囲気ができている。

(フロアー：NPO 法人理事長)

震災ボランティアがきっかけで始めた。ふれまちの福池の一員。障害者のほうから地域に発信する。自分たちでイベントを立ち上げている。グランドゴルフが8年目。事業所であるが粛々としてやっている。重度の心身障害者父母の会がボランティア山形とつながっている。南相馬に出向くボランティアの支援を行なっている。障がい者の地域づくりをしている。

(牧野氏)

地元で生きていけるような産業を生み出す。高浜原発そばにある若狭高浜エルどらんどは、街でインフラを作っている。

(青田氏)

職員22人中残ったのは6名である。9月30日

現在で、県外避難状態で退職。障害者のところで働いた人は0だった。50から60代で担わなければならなかった。子どもが乳幼児になるにしたがって残っていない。実際、地元で跡取りとして戻っている人はいたが、ほとんどが東京に避難させている。ここで結婚でき、子どもを育てることができるか不安を感じている。ここで暮らすのは無理であるという判断をしている。大手企業は、設備投資をせず、いつでも撤退できるような状態にしている。

除染に関しては、モデル除染しかしていない。飯館村、南相馬など効果がわからない。企業がなかなか元に戻れない。戻ってきている人は、高齢者でほとんど限界集落に近い状態であり、行政の策はない。ヘルパーは70歳まで復活。要介護は30パーセント。ますますディサービスが必要だが、休業中が多い。病院も看護師が半分しかいない。看護師がたりないので全面開業できない。何をしなければいいのかわちよと高齢者がうんと高齢者を見ている。5年のあいだに何らかの道が見えてくるのだろうか。



#### 5. おわりに

今回のパネルディスカッションでは、震災後の生活再建に向けコミュニティーをどう再構築していくかについて、阪神淡路大震災の経験と東日本大震災の経験を踏まえ話し合おうと企画したものであった。パネリストがすべて被災経験者であったことは、何よりも障がいのある人や高齢の方々の現実を浮き上らせるものであった。前半は問題提起とパネリストの言述に、後半は参加者とのコ

ラボレーショントークというディスカッションの形態をとったが、会場に居合わせた参加者間で現状の認識を共有することができたように感じられた。

牧野氏の問題提起では、自身の震災体験を基に、高齢社会でのコミュニティの再構築化、復興時における情報社会のあり方、阪神淡路大震災と東日本大震災との相違点が挙げられた。予め、問題提起者とパネリストの言述の相互理解ができていたためか、問題提起事項と各パネリストの言述に関連性を持たせることができていたようである。

第1話題提供者の倉田氏は、都市における共同組織の無い状況下で、支援を必要とする人が、「こんなことに困っている」という生活の細々とした具体的なニーズを拾い上げて、そこからまちづくりを出発させた。心のふれあいある HAT のコミュニティを協議していこうとする地道な継続活動が語られた。行政側にニーズを理解してもらうための訴えかけは何度も難航しながら、人と人が繋がることによりコミュニティの主張力を高めていくことを倉田氏は実感し、ふれまちな皆さんで行政に提言して協働しながら、まちづくりを展開した。現在では灘地域活動センター、民生委員、HAT 灘の浜あんしんすこやかケアセンターが連携した状況をつくり出している。フェイストゥフェイスで構築されたことにより、形式的なつながりではなく、心のふれあいから構築された連携によることで、障がいのある人や高齢者が支援のニーズを求めやすい環境を構築したものである。心のふれあいが生活再建の大きな原動力になっていることを示唆するものであった。これは、都市型、農村型の如何を問わず、大切な事項ではないかと考えられる。

第2話題提供者の吉田氏の発表は、障がいのある人が震災を経験しながら、地域で暮らし、幾度も困難に遭遇し、そこで自ら感じられた思いを自活することに繋げ、アイデアを案出し実行に移し、挑戦していく姿がライフヒストリーを通して語られるものであった。震災を生き抜くエネル

ギーが強く伝わってきた。障がいのある人は、震災時、助けがなくては生きていけないという精神的なハンディを負って、「お世話になっているのだから」と遠慮して、主張することが中々できない風潮がある。しかし、本人が望むことをどんな状況においても主張していくことは、その人にとっての自己実現に繋がり重要であることを吉田氏の言述から実感することができた。

第3話題提供者の青田氏は震災直後と、現在と2つの時系列軸で話されたが、それぞれの事象に関して、大災害に直面した障がいのある人の置かれている状況とコミュニティ、事業所の苦境を浮彫りにした。高齢社会は、震災復興の速度を遅くする要因となっていることを牧野氏は指摘したが、南相馬では若者は帰還せず、これからの地域社会を高齢者が担っていかなければならない苦しい状況がある。要介護者が30%に及び、限界集落化している深刻な現状が伝えられた。青田氏の運営する事業所も職員スタッフが震災で大幅に激減し、放射能の影響で今後も若年層の雇用を望むことは難しく、次の担い手を高齢者に求めることを余儀なくされた現状に置かれている。青田氏は60代以上のヘルパー養成についての必要性を構想しはじめていると語った。高齢者が障がいのある人や要援護の高齢者支援事業所を支えなくてはならない問題は南相馬だけの問題ではない。

少子化による高齢社会化が進み、産業が都市部に集中している日本の現状の中で、過疎地域全体に横たわる事業所が抱える問題だともいえる。原発で影響を受けている地域コミュニティは、今後も若年層の働き手を確保することは難しい。その土地で健康に暮せる保証は不明であり、被曝のリスクを避けるためには、若い一人の人がずっとその土地に留まり支援し続けることには躊躇するものがあるだろう。原発立地地域の問題としてではなく、日本全体で助け合う継続的な支援のネットワークが必要であることを痛感させられた。フロアーからは震災ボランティアに支援活動を行って

いる方々からの意見なども出たが、ボランティアが何を支えたらよいのか、現状を知ること、生活再建のための具体策が見えてくるのが大きい。青田氏は南相馬の地に一度来てもらい、実感してもらって理解してもらいたいと述べられた。東日本大震災では、ボランティアの価値観で被災地の支援ニーズに一致しない支援を行い、被災者が戸惑いボランティアも戸惑うという支援のギャップが多くみられた。これは、東日本の当地の事情と、阪神の事情とでは違っているために起こってくるギャップで、現場に足を運びこのような話し合いをすることで相違点を明らかにし、生活再建に向けたコミュニティが再構築していくために、どのような支援が必要であるかを明確にすることが大切であると実感された。

平時、私たちは機器に対して過度に依存していることに気付いていない。牧野氏はその事を指摘し、情報のあり方について警鐘を鳴らすものであった。ロコミや避難所の掲示板など自分自身の身一つで確かめられる情報入手手段を認識しておくこと。一方、東日本大震災で効果を発揮したツイッターにみるソーシャルメディアの活用。双方を併用して震災時にいかに確実な情報を得るかが生活再建に必要な事項となろう。倉田氏によれば、阪神の場合、マスメディアに大きく報道されると、支援が当地に集中してしまったという。インパクトある長田区の火災場面ばかりが報道され続けたために、激震地である灘区の支援は置き去りにされ、そのわだかまりは、「あの地区の人は支援を受けた。自分たちは支援を受けられなかった」という住民間の感情の溝をつくってしまっている。青田氏によれば、正確な情報を知りえず、放射能の拡散情報が正確に流れなかったために、南相馬の多くの人たちは最も放射能が飛散した飯館村に避難することになってしまった。そのことによって多くの人たちが被曝してしまった。福島第1原発の原子炉の状態もはっきり情報が伝達されないために、かえって南相馬は「危険なところに近い地

域」と敬遠される地域になってしまっている。現場を知らない国の「自宅待避」の指示が、閉鎖的空間で生活することがとても苦手な当地の障がいのある人を命に関する重篤な状態に陥れていった。広域への情報の流し方と現状の大きなギャップに重大な問題がある。ロコミやソーシャルメディアにはデマ・風評を作り出してしまいう可能性も孕んでいる。私たち自らが情報の「送り手」であり、「送られ手」でもあること自覚し、正確な情報作りに努め、正確に伝えていくこと。更に、心のふれあいを大切にしながら情報による人と人とを繋げるネットワーク化を図っていくが必要だろう。この繋がりが深められることによって「絆」が生まれ、この絆化の働きそのものに、生活再建進展の機能があるといっていだろう。